

# 体育系クラブ学生の大学生活に関する一考察

—沖縄国際大学の事例—

宮 城 勇

A Study on the Campus Life of the Students Affiliated with the Athletic Sports Clubs

—The Case of Okinawa Kokusai University—

Isamu Miyagi

## 緒 言

今日、我が国は教育史上未曾有の高学歴社会を形成しつつある。事実、1981年には高校への進学率が94.3%を超え、大学進学率(短期大学も含む)もアメリカの45%台に次いで37.4%を示している<sup>6)</sup>。

このような教育的状況、および価値観の多様化した現代社会は、当然大学の体育や学生スポーツとしての従来の運動部活動のあり方まで変えて来た。

学生スポーツが高く評価されるゆえんは、一方において学業にいそしみながら、他方において日頃から厳しい練習に精進し、これを通して忍耐と努力の精神が涵養せられるところにあると思われるが、大西<sup>8)</sup>は、大学のスポーツ集団にみられる新たな傾向として、大学における運動部の位置づけと、スポーツ活動に対する価値観、生活観の変化、社会的背景によるスポーツの大衆化について言及し、大学スポーツの変容を指摘している。

これ等を考えあわせた時、その社会、教育の急速な変革と共に生れ、成長して来た人々の大学生活について考察し、その実情を知ることは意義のあることと考える。

本研究は、本学体育系クラブ学生の大学生活に関する実態をアンケート調査法によって分析、把握すると同時に、大学における今後のスポーツ活動の方向性を導き出すための、基礎的資料を得ることを目的とするものである。

## 方 法

本学一・二部に在籍し、体育系クラブに所属する全学生と、現在体育会には未加入であるが、将来は正式加入を希望する同好会所属の学生を対象に、質問紙法による調査を昭和60年1月に開始し、昭和60年2月20日に回収を完了した。

調査総数は316人で、その内訳は男子253人、女子63人であった。回収結果は1年生97人、2年生74人、3年生77人、4年生39人で、回収率は男子91.3%、女子88.9%を占め、総回収率は90.8%の、比較的高率の回答を得ることが出来た。なおクラブ別の回答者数を表1に示した。

表1. クラブ別回答者数  
(単位：人)

	男子	女子	計
バドミントン	10 (2)	12	22 (2)
空手道	6		6
サッカー	20		20
軟式庭球	5	7	12
ラグビー	14 (3)		14 (3)
ボウリング	4		4
柔道	12 (1)		12 (1)
弓道	14		14
硬式庭球	12	9	21
陸上競技	29 (3)	4	33 (3)
ハンドボール	16		16
バスケットボール	11 (1)		11 (1)
ダイビング	7	8	15
ソフトボール	12		12
卓球	8	2	10
バレーボール	12	11	23
野球	22 (3)		22 (3)
剣道	12	3	15
ホッケー	5		5
計	231(13)	56	287(13)

† ( )の中の数字は二部在籍学生で、総数に含まれている。

## 結 果

### 1. 健康管理について

健康管理はスポーツ活動を継続し、発展させていく上で不可欠な要素である。大学生の

現在の健康状態、入学後の通院・入院・怪我の体験の有無、スポーツ傷害保険の加入状況、睡眠時間等を調査することによって、体育系クラブに所属する学生達の健康観や、その管理状況の現状分析を試みた。

現在の健康状態は図1、図2に示す通りである。

「健康である」は全体で93.3%の高値を示し、「病気がちである」については1・2・3年生に6～8%前後の回答がみられるのみで、4年生には1例も認められなかった。「通院・加療中」には2・3年生に極く少数の回答を得ることが出来た。

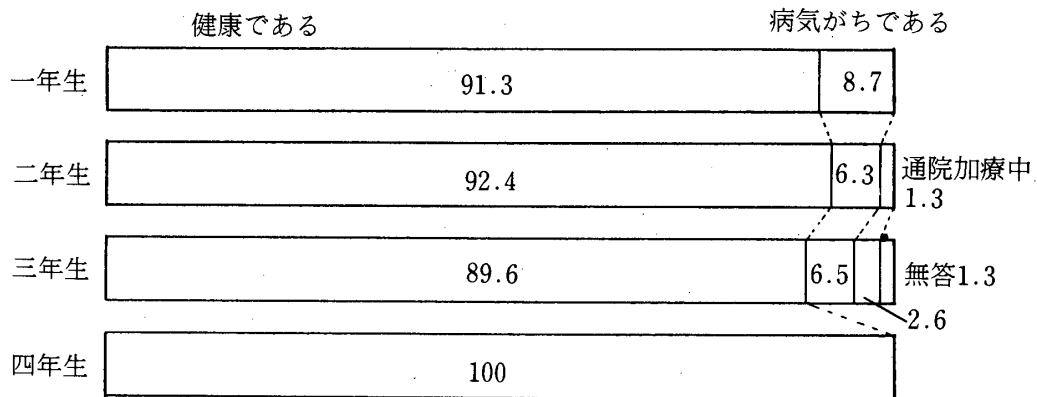


図1. 健康状態 (学年別)

(単位：%)

男女別の健康状態は「健康である」が男女共にはほぼ同率で、90%台の非常に高い数値を示した。一方「病気がちである」は男子の方が女子に比べて若干大であることが明らかとなった。

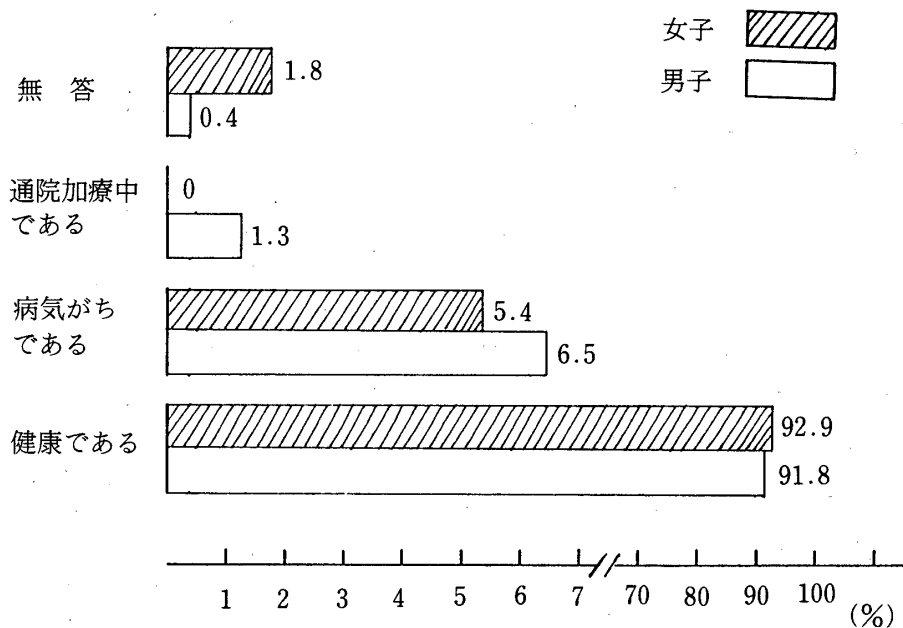


図2. 健康状態 (男女別)

大学入学後の通院・入院・怪我の体験は、空手道・ボウリング・ソフトボールの3クラブから「全くない」という回答を得た。また同回答肢には表2に示す通り、19クラブ中13クラブの構成員の70%以上の回答者からも同様の結果が確認された。

クラブ間の現状はラグビー・柔道・陸上競技・野球・剣道に比較的長期の通院・入院・怪我の体験者をみることが出来た。

表2. 大学入学後の通院・入院・怪我の体験

(単位：%)

	1	2	3	4	5	6	無答
バドミントン	86.4		4.5			4.5	4.5
空手道	100						
サッカー	95.0				5.0		
軟式庭球	75.0	8.3	8.3		8.3		
ラグビー	28.6	35.7	14.3		21.4		
ボウリング	100						
柔道	41.7	8.3	25.0	8.3	8.3	8.3	
弓道	92.9		7.1				
硬式庭球	61.9	28.6	4.8				4.8
陸上競技	57.6	6.1	6.1	12.1	12.1	6.1	
ハンドボール	93.8						6.3
バスケットボール	72.7	9.1				9.1	9.1
ダイビング	86.7	13.3					
ソフトボール	100						
卓球	80.0	10.0				10.6	
バレーボール	60.9	13.0		13.0	4.3		8.7
野球	72.7	9.1		4.5	4.5	4.5	4.5
剣道	40.0	20.0		20.0		6.7	13.3
ホッケー	80.0		20.0				

- † 1. 全くない。 2. 2～3日の通院、入院を経験。 3. 1週間前後の通院、入院を経験。 4. 約2週間の通院、入院を経験。 5. 約1ヶ月の通院、入院を経験。 6. 3ヶ月以上の通院、入院を経験。

男女別では「全くない」と「約2週間の通院・入院・怪我を体験」に、少差ではあるが女子が男子を上回る結果を示し、長期の「約1ヶ月」「約3ヶ月以上」の体験については、男子が女子の約2倍近い形となり顕著な性差を示した。

スポーツ傷害保険の加入状況については表3に示す通りである。「加入している」には13クラブが回答し、それ等の中でも陸上競技(90.9%)を筆頭に、バレーボール(87.0%)サッカー(75.0%)バスケットボール(72.7%)等が比較的高い加入率を示した。しかしながら空手道と卓球には1例の加入者も認められなかった。

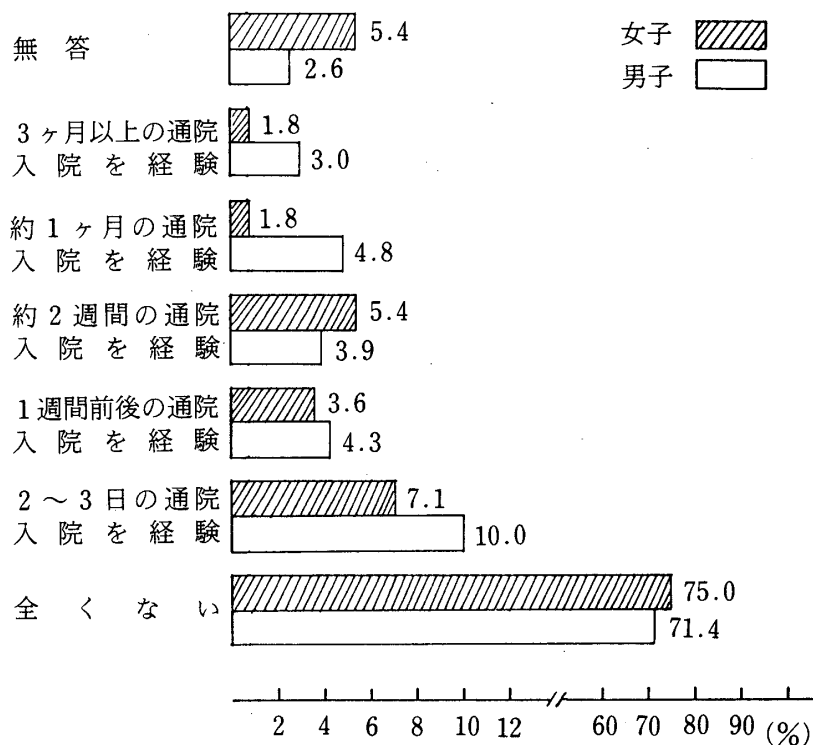


図3. 大学入学後の通院・入院・怪我の体験 (男女別)

表3. スポーツ傷害保険の加入状況

(単位：%)

	加入している	加入していない	わからない	無答
バドミントン	4.5	63.6	22.7	9.1
空手道		100		
サッカー	75.0	5.0	20.0	
軟式庭球		91.7	8.3	
ラグビー	57.1	14.3	28.6	
ボウリング		75.0	25.0	
柔道		91.7	8.3	
弓道	7.1	64.3	28.6	
硬式庭球	66.7	23.8	9.5	
陸上競技	90.9		9.1	
ハンドボール	6.3	68.8	25.0	
バスケットボール	72.7	9.1	18.2	
ダイビング	26.7	66.7	6.7	
ソフトボール	16.7	50.0	33.3	
卓球		100		
バレーボール	87.0		13.0	
野球	68.2		31.8	
剣道	6.7	46.7	46.7	
ホッケー		80.0	20.0	

一方スポーツ傷害保険に関する認識については「わからない」と回答した構成員が17クラブに存在することが確かめられた。

スポーツ活動者の睡眠時間については、全体で「約8時間」が最も多く30～40%台の回答率を占めた。また「約7時間」「6時間」の数値も目立った現象となった。一方学年別でも前記時間帯による上位順位の変動は認められず、「約9時間」「約5時間」が4位、5位群となった。

## 2. 大学生活について

大学生活の実状・実感については、大学生活全体の満足度、日常の生活時間、学業とスポーツの両立、アルバイト等に関するアンケートの調査結果を基に検討を加えてみた。

図4に示す通り、学年別にみる大学生活の満足度は、全体で「非常に満足」「満足」の回答率が51～67%の過半数を超え、2・4年生においては70%近くの高数値をみることが出来た。特に「非常に満足」で、1・2・3年生が1桁の低率回答を示したのに対して、4年生の17.9%の高数値は特異な現象となった。しかし「不満足」「非常に不満足」を含むも各学年に認められ、1年生の39.1%を筆頭に3年生(33.8%) 4年生(28.2%) 2年生(24.1%)の順の数値となった。「非常に不満足」は女子回答者には1例もなく、僅かながら男子にのみ認められた。

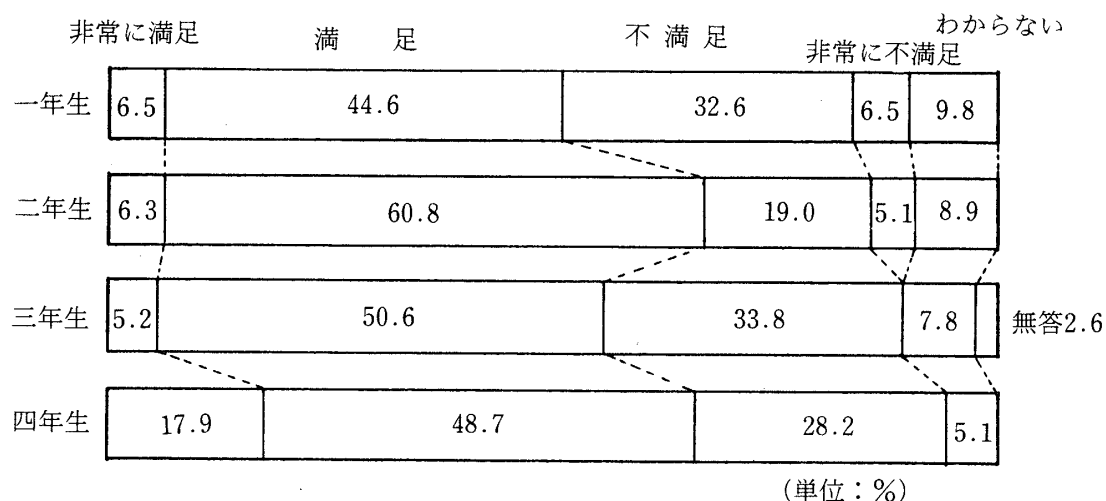


図4. 大学生活の満足度 (学年別)

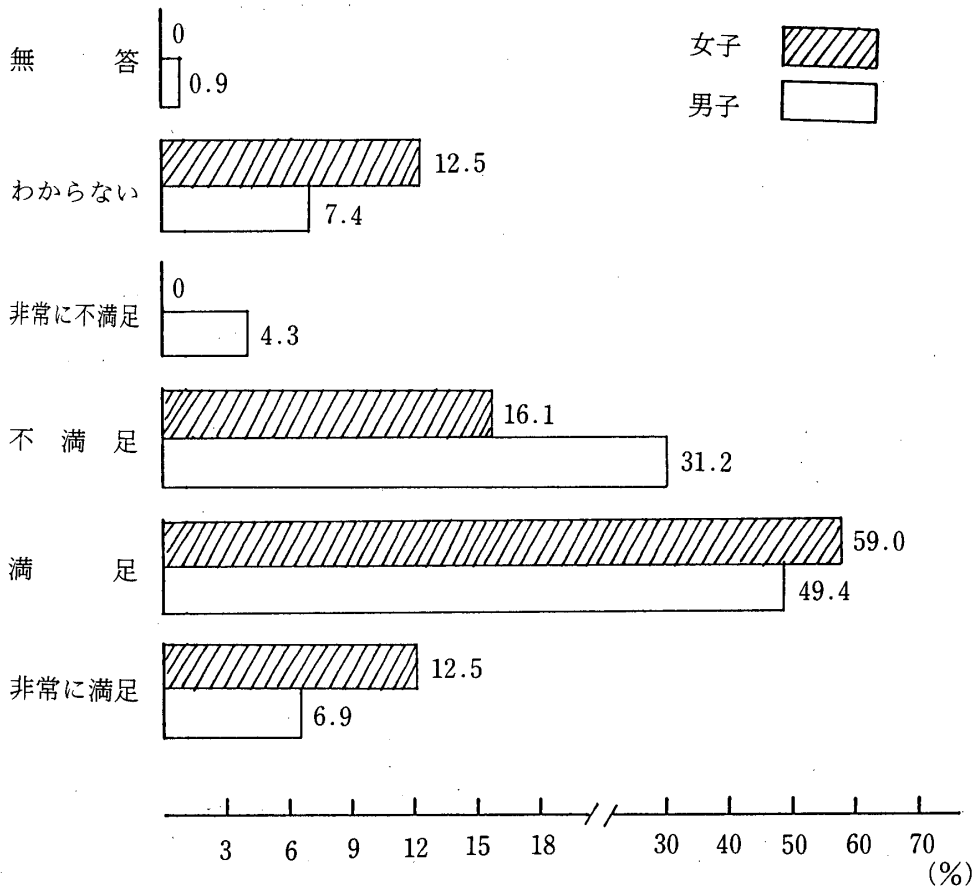


図5. 大学生生活の満足度 (男女別)

1日の中で学習および調査・研究に要する時間を調査した結果は図6に示した。

「2時間以上」学習の実践分布を学年別に概観してみると、4年生が38.4%と最も高率となり、次いで1年生(28.2%) 2年生(27.8%) 3年生(24.7%)の回答率を示し、長時間学習については4年生が他学年をやや上回った形となった。「学習時間ゼロ」も全学年にみられる現象である。

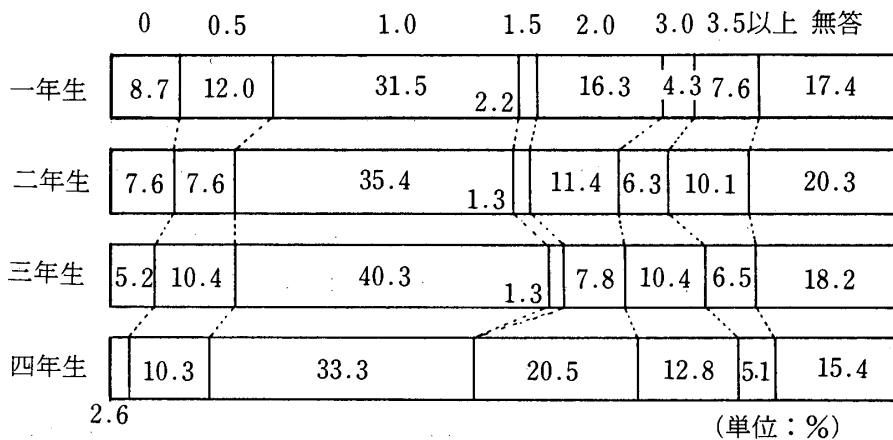


図6. 学習および研究時間 (学年別)

男女別の学習時間については図7に示した。これによると男女間の学習時間の差が明確に出ており、長時間学習は女子が男子を凌駕した結果となった。逆に「0.5時間」「学習時間ゼロ」には約3～4倍の高率で男子の方が女子より大となった。一方「1時間」学習では、ほぼ同率の35%台の回答が男女間に認められた。

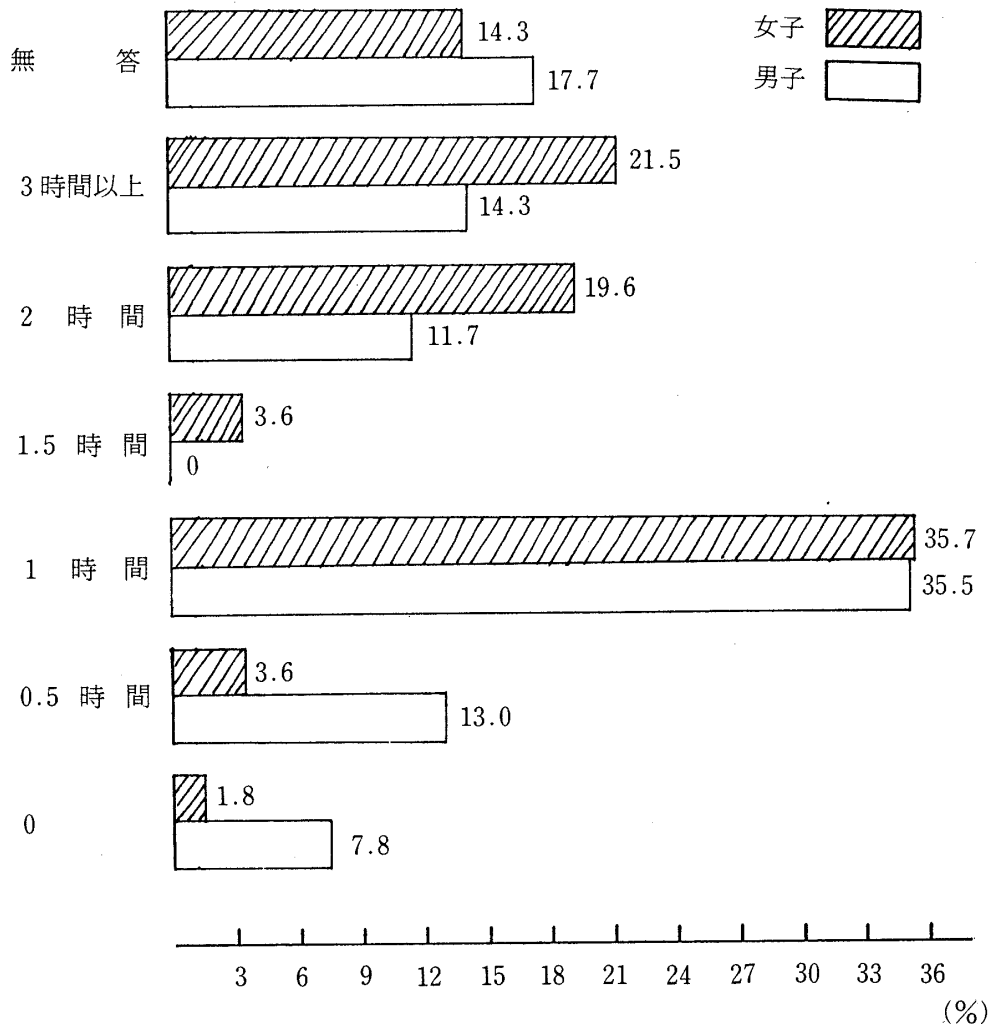


図7. 学習および研究時間（男女別）

学業とスポーツ活動の両立について調査した結果「完全に両立している」は1・2年生が共に1桁台で、3・4年生の2桁台の数値には及ばなかった。一方「全く両立していない」でもこれとほぼ同様の現象がみられた。

「両立している」と実感している人は1・3年生で各々40%台を示したのに対して、2・4年生では50%台のやや高い回答を示した。また「両立していない」とする人は4年生が最も少なく(35.9%)、次いで2年生にそれとやや近似の数値が認められた。一方1・3年には50%台の、高い数値の「非両立」感を確認することが出来たが、今後検討すべき重要な課題といえる。



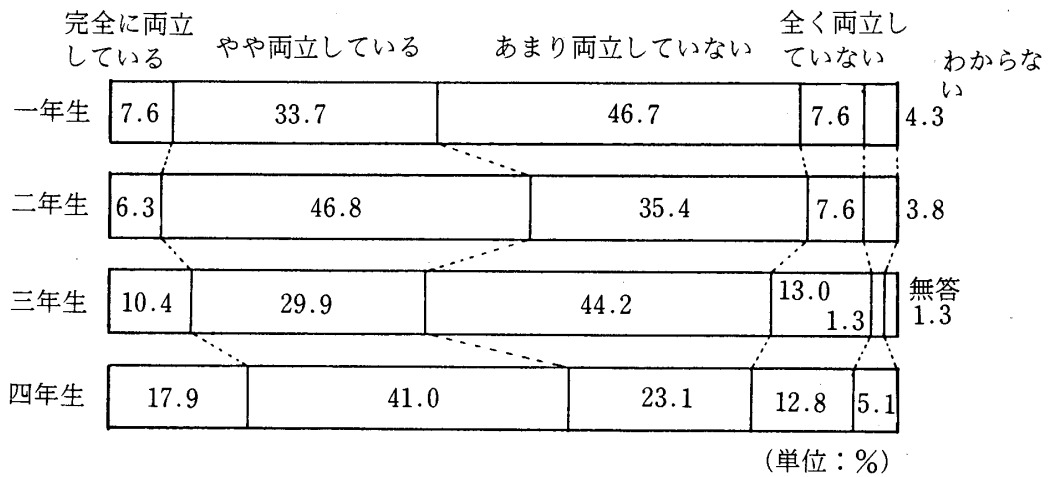


図8. 学業とスポーツの両立 (学年別)

図9に示した通り、男女別では「全く両立していない」で男子が女子の2倍の回答率を示し、学業とスポーツの両立の困難性については、女子より男子がより強く認めた形となった。

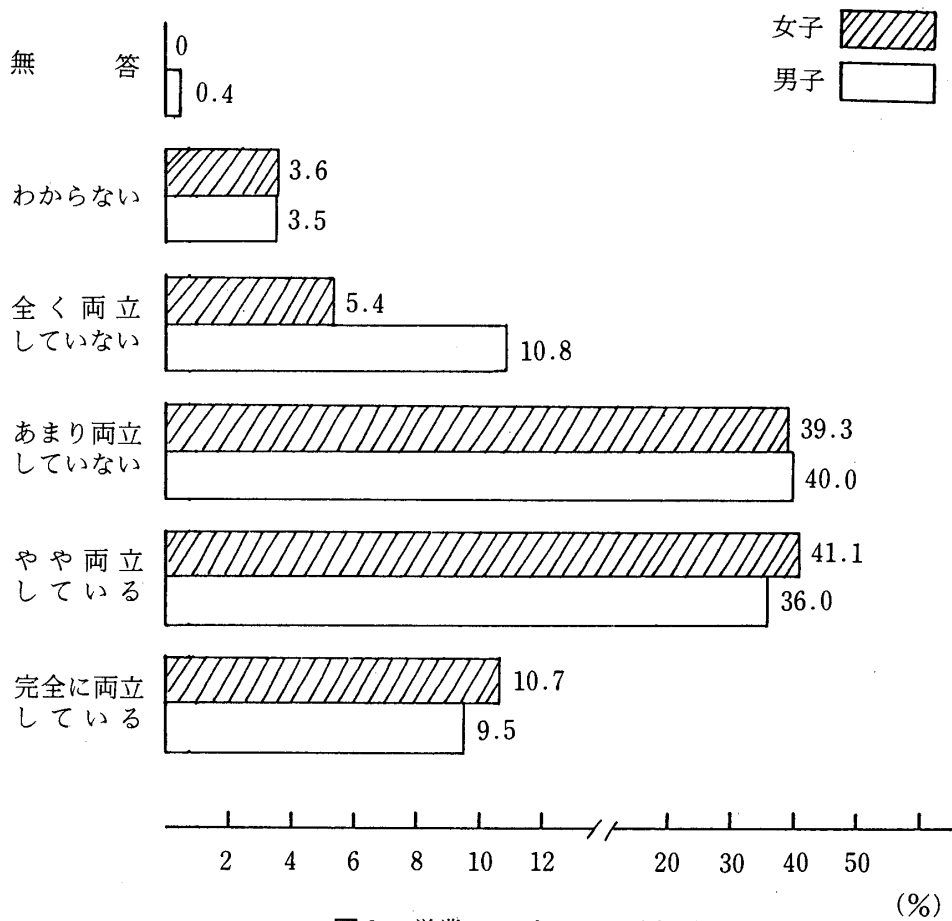


図9. 学業とスポーツの両立 (男女別)

学業とスポーツが両立しない理由については図10に示した。これによると「クラブの練習が長過ぎて学習時間が取れない」には極めて低い回答を得ただけであった。一方「練習で疲れて学習意欲が湧かない」では1年生(12.7%) 3年生(16.1%)が、比較的高率の数値を示したものの2・4年生は6%台にとどまった。「クラブ活動前後のチームメートとの雑談」には、各学年約8～15%台の範囲でこれを確かめることが出来た。また「テレビ・ラジオ・オーディオ等」による理由については、1年生が最も大きい影響を受け、次いで2・3年の順となり、4年生は最も少ない数値を示した。「アルバイトで学習時間が足りない」では、2年生(33.3%) 3年生(24.2%)に高い影響率が確認された。一方見逃せない結果は「友人(クラブ仲間以外の)との交際」をその理由としている回答が比較的多く、いずれの学年でも2桁台の数値が認められたことである。

	1.	2.	3.	4.	5.	6.	7.	8.	無答
一年生	12.7	2.5	15.2	21.5	10.1	1.3	22.8	12.7	1.3
二年生	6.3	8.3	12.5	33.3		2.1	18.8	14.6	4.2
三年生	1.6	16.1	11.3	11.3	24.2	9.7	14.5	4.8	6.5
四年生	6.7	8.9	4.4	6.7	11.1	2.2	55.6		

2.2                      5 6 7 8                      無答 (単位：%)

- †
1. クラブの練習時間が長過ぎて学習する時間が取れない。
  2. クラブ練習時間で疲れて学習意欲が湧かない。
  3. クラブ活動前後のチームメートとの雑談で時を過ごしてしまう。
  4. テレビ、ラジオ、その他オーディオ等で時を過ごしてしまう。
  5. アルバイトで学習時間が足りない。
  6. 漫画、週刊誌等で時を過ごしてしまう。
  7. 友人(クラブ仲間以外の)との交際で時を過ごしてしまう。
  8. 趣味の時間が長過ぎて学習時間が足りない。

図10. 学業とスポーツが両立しない理由(学年別)

読書や新聞等に費やす時間は「約1時間」に全体で54%が回答しており、中でも4年生は61.5%の最も高い数値を残した。「約2時間」には全体で8.5%と低く、4年生の12.8%を最高に漸次学年が下がるにつれて数値も小さくなり、1年生では4.3%の低率の記録となった。一方「約0.5時間」のように、短時間の読書時間については全学年とも積極的に、20%台の比較的高い回答率が認められた。

趣味や稽古ごとに要する時間は、「約1時間」に最も多くの回答がみられた。次いで「約

2時間 「約0.5時間」 「約3時間」にも1桁台の回答を確かめることが出来た。一方趣味・稽古ごとを特に持ってない、とする回答も各学年に、しかも比較的高率の数値が認められた。

### 3. 生活費について

学業やスポーツ、その他に必要な大学生の生活経費はいくら位で、それはどのようにに企画されているかについて調査し、分析を試みることによって生活費の実情を把握してみたいと考えた。なお入学金・授業料・その他の学校納付金については調査の対象から除外した。

生活費については図11、図12に示す通り、「3万円前後」が各学年で最も多く40%台を占め、次いで「4～5万円」(30%台)と続き「6～7万円」にも2桁台の回答が寄せられた。また「10万円以上」の高額生活費についても、僅かながら1・2・3年生にそれが認められた。

男女別に概観してみると「3～6・7万円」台の範囲に男女がほぼ同率を占め、2桁台のパーセンテージを示した。

収入源については大多数の人が「両親」と回答した。また「アルバイト」も大学生の収入源として大きなウェイトを占めており、全学年とも2桁のアルバイト実施率が示す背景が明らかとなった。一方「兄弟・姉妹」「親戚」からの援助は極めて少ない結果となった。

アルバイトの実施状況については図14に示した。この図からも理解出来るように、2・3年生では実施者が非実施者をわずかに上回り、1・4年生では非実施者の方が実施者を上回った形となった。またアルバイトの実施率は3年生が最高を記録し、4年生は最少の数値を示した。

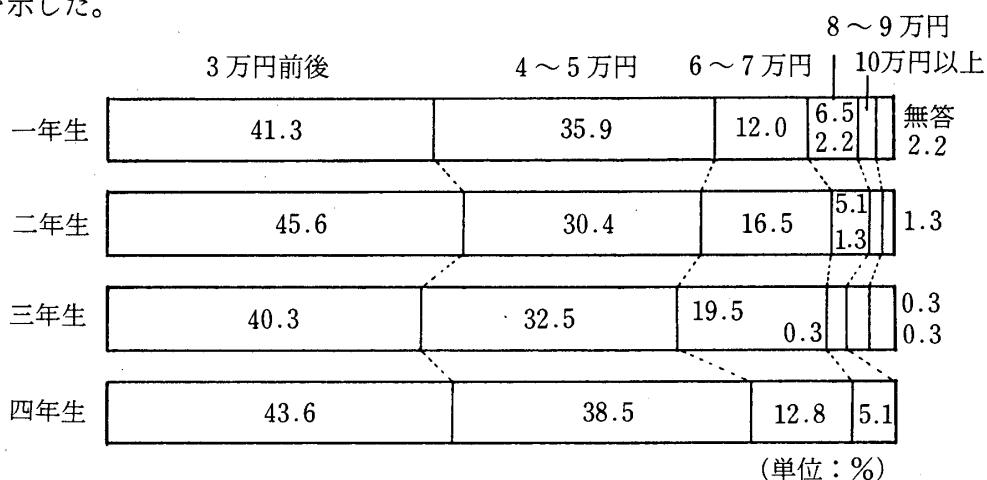


図11. 生活費（休暇時を除く月平均額）（学年別）

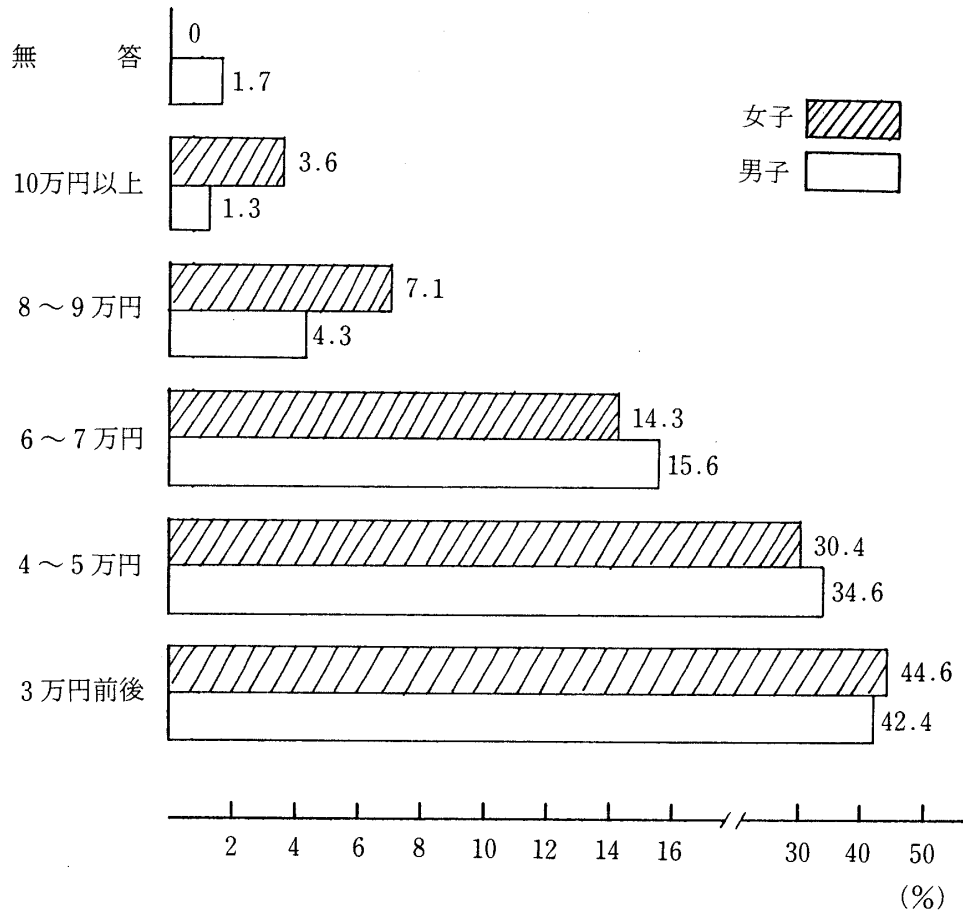
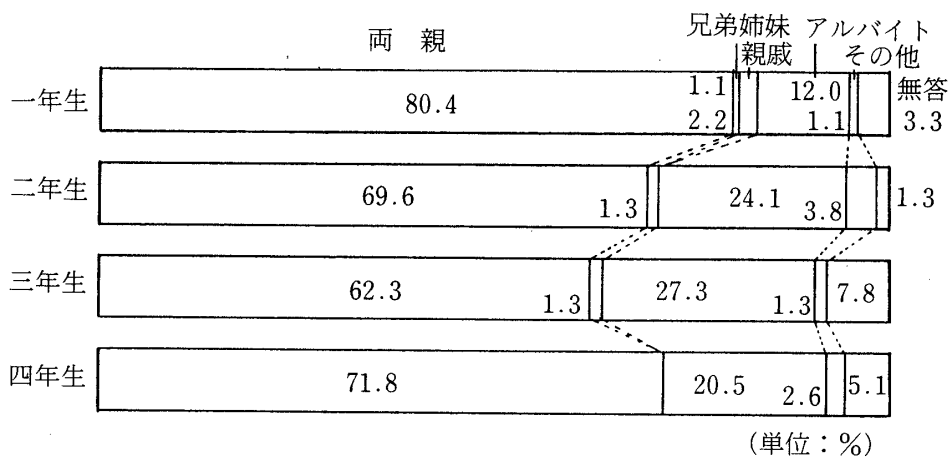


図12. 生活費 (休暇時を除く月平均額) (男女別)



(単位：%)

図13. 収入源 (学年別)

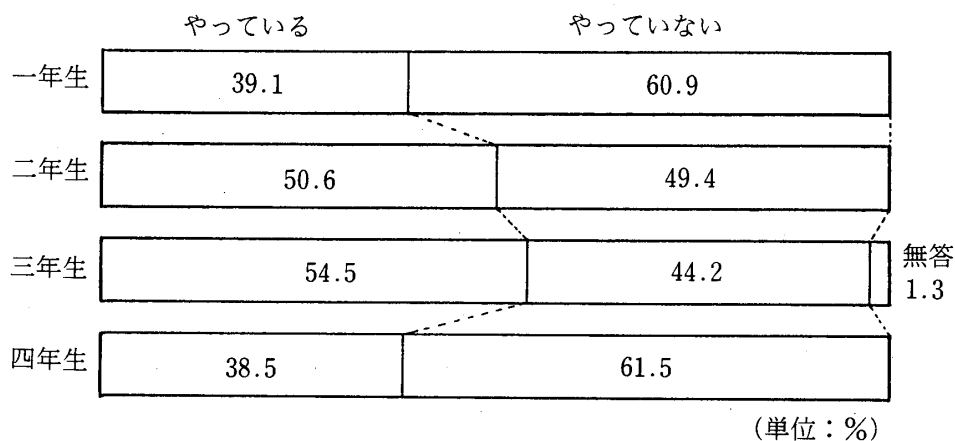


図14. アルバイトの実施状況 (学年別)

男女別のアルバイト実施については図15が示す通りほぼ同率であるが、どちらかという  
と若干男子が女子を上回った。

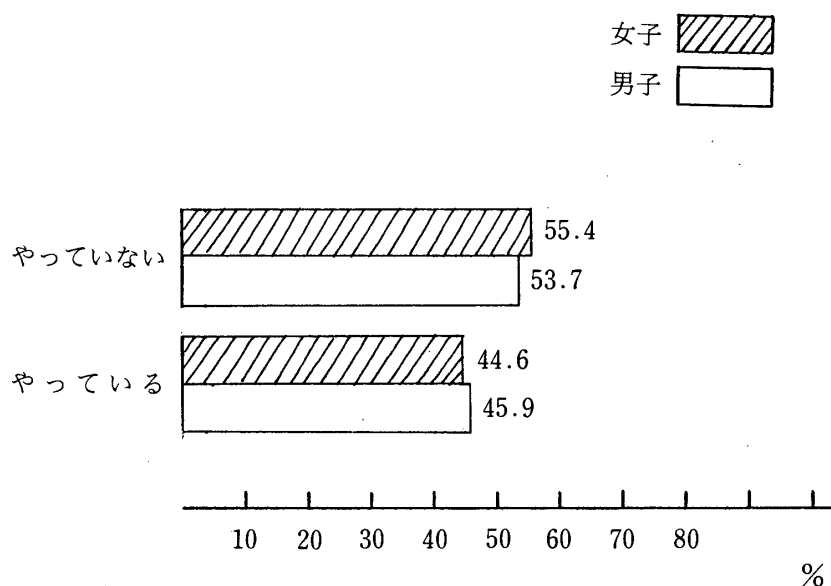


図15. アルバイトの実施状況 (男女別)

アルバイトの実施日数、実施時間については図16と図17に示した。

実施日数は「5～6日」が最も顕著で、「3～4日」「1～2日」の順となった。また「全日実施」の回答も少率ながら全学年に認めることが出来た。

実施時間については「5時間」が全学年を通じて圧倒し、ついで「4時間」「3時間」となった。また3年生実施者の70%以上に、1日「約5時間」のアルバイト実施が認められた。

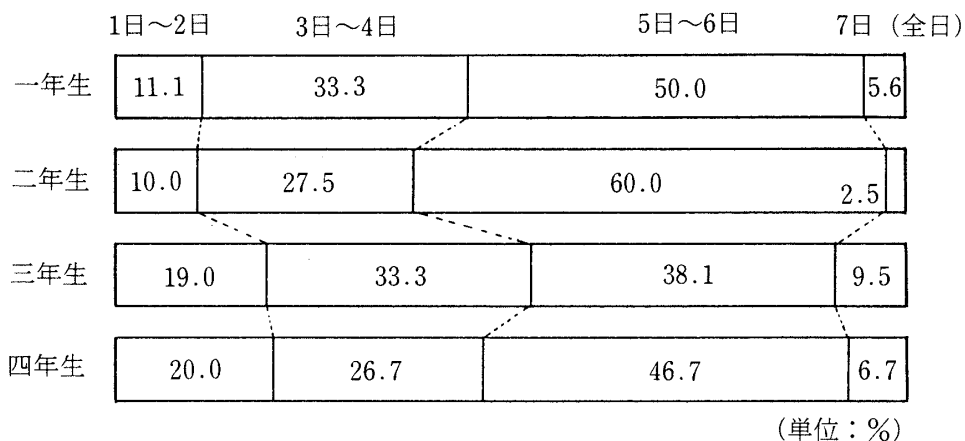


図16. アルバイトの実施日数 (週平均) (学年別)

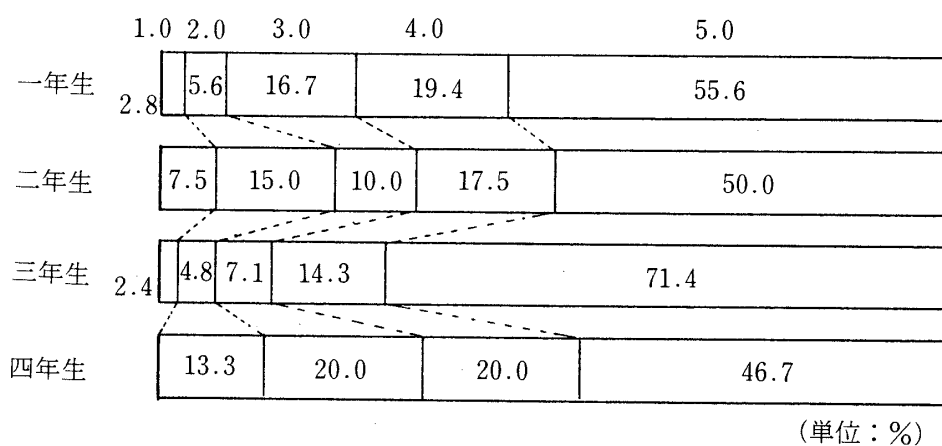


図17. アルバイトの実施時間 (1日平均) (学年別)

## 考 察

現在の健康状態を総合的に判断すると、比較的に良好であるといえる。すなわち本学の体育系クラブ所属者の「通院・加療中」者は極めて僅かで、しかも男子のみにその回答が得られただけであった。全体比でも「病気がちである」が5.4%、「通院・加療中」も少数で1%の数値を占めたに過ぎない。従って今回の調査結果で判断する限り、現在の健康状態は、男女・各学年共に絶対的高率な「健康」状態の中で大学生を送り、スポーツ活動を継続していると考えることが出来る。

大学入学後に長期の「通院・入院・怪我」を体験した回答者は、格闘技スポーツの柔道や剣道、試合時の身体接触が激しいラグビー・サッカーに多くみられる傾向が認められた。

一方特異な現象として注目したいのは、空手道の「全くない」が100%を示していることで、格闘技の中でも最も激しい身体接触が要求される競技の練習や試合で、「怪我なし」の状態を維持してきたことは、誇るべき立派な実績といえよう。準備・整理体操に十分時間をかけ、日頃の健康管理に留意して活動していることが推測出来る。

男女別に概観すると、短期の「通院・入院」の経験は女子が男子を上回るものの、長期になるにつれて男子が女子を圧倒する傾向を示した。このような性差が生じた主要因は、女子と比べて男子の方が多く怪我の可能性の高い競技種目に関与している事実が考えられる。

ともあれ大学入学後の通院・入院・怪我の体験は「全くない」が大勢を占めており、比較的理想的な健康管理の下でスポーツ活動が実践されていると思われる。

課外活動中の事故発生率は、正課時の約4倍ぐら<sup>1,2)</sup>いの高率である、ということを考えあわせると、課外活動を実施するにあたっては万全の配慮をして事故防止に努めることは勿論、不慮の事故に備える心構えもスポーツマンとして大切であると考えられる。本学におけるスポーツ傷害保険の加入状況は、クラブ間でバラツキの傾向を示し、全体的には低調であると解釈することが出来る。

青年後期の大学生は、人生の中でも最も健康感が旺盛<sup>3)</sup>で、保険に対する関心は低くなりがちである。しかしながら、空手道・卓球の「加入ゼロ」の現象はスポーツ傷害に関する認識の浅さを指摘するもので、憂慮すべき問題といえよう。クラブ間の自覚の高揚を図るための大学側の対応策が必要であると考えられる。それには全クラブを対象とすることが理想であるが、当初は競技種目を限定し、該当競技の構成員は全員、スポーツ傷害保険への加入を義務づける、という方策など、今後慎重に検討すべき課題となろう。

睡眠時間は「約8時間」に最も多くの数値(40.3%)が認められ、次いで「7時間」(25.3%)「6時間」(16.3%)の結果となった。「6時間」「5時間」睡眠には、全体で21%相当の数値を示しているが、激しいトレーニングを日課とする大学生の睡眠量としては少な過ぎると思われる。

辻等<sup>10)</sup>の研究でも睡眠時間6時間未満の者が、運動クラブの学生の中に相当数存在していることを指摘しており、上記の結果が必ずしも本学学生のみ現象である、とは断定出来ない。

睡眠時間については、アルバイト実施との有意な相関が予想されるものの、小野<sup>7)</sup>は「運動や労働にともなう疲労の回復は、栄養摂取のバランスと、休養や睡眠の取り方で決まる」と力説しており、ハードトレーニングの結果として生じる組織細胞の疲労回復の一手段となる睡眠に関しては、もっと留意する必要があるように思われる。

大学生活の満足度については、各学年とも「満足」が過半数を越す数値となったものの、一方では「非常に不満足」にも低率ながら1・2年生にその回答が認められたことは気にかかる現象である。全体では「非常に満足」9.0% 「満足」51.2% 「不満足」28.4% 「非常に不満足」2.9% 「わからない」7.9%の結果となった。

男女別の満足度は、女子（71.5%）が男子（56.3%）を凌駕しており、男子より女子の方が大学生活への満足度は多く持っていると考えられる。

学習・研究活動に関する今回の調査では、長時間学習（2時間以上）は4年生が顕著で、3年生が最も少ない結果となった。「学習時間ゼロ」は1年生に最も多くの回答が認められたが、2・3年生と学年が進むにつれてその数値は次第に小さくなり、4年生では2%台の少数値が確認されただけであった。一方「無答」も各学年比較的高い数字を示している、このことが何を意味しているか即断は出来ないが、その背景については今後慎重に究明する必要があるように思われる。

男女別に学習時間を言及してみると、女子は比較的良好に勉強し、男子はあまり勉強していないという事実が明らかとなったが、今回の結果とほぼ同様の傾向を、総理府が実施した「<sup>9)</sup>大学生の学習時間についての調査報告書」にも認めることが出来る。

ともあれ、学生のスポーツ活動は、運動の実施による爽快感・疲労感が心身に充実感を生み、生活にリズムを与えて学習意欲の喚起や効率化に役立つような、実践上の綿密な計画や努力が必要であると考えられる。

学業とスポーツの両立は、2・4年生の「両立している」が「両立していない」を上回ったのに対して、1・3年生は「両立していない」が「両立している」を上回る結果を示した。

男女別では、「両立している」と自覚しているのは女子が多く、「両立していない」と考えるのは男子の方が優位の数値を占めた。

全体では「完全に両立している」（10.6%） 「やや両立している」（37.9%） 「あまり両立していない」（37.4%） 「全く両立していない」（10.3%）の結果となった。

<sup>4)</sup>小出や<sup>5)</sup>小村は、現代の大学スポーツのあり方について言及し、学生スポーツはあくまでも学業とスポーツの両立を目指すべきである、と提言しているが、学生アスリートとして、学問研究の重要性について再認識する必要があるように思われる。

学業とスポーツが両立しない理由については、部活動が長く学習時間が足りない、とする直接的影響よりも「テレビ・ラジオ・その他のオーディオ等」 「チームメイトとの雑談」 「アルバイト」 「友人との交際」等で時間を過ごし、学習する時間を失なう場合の方が多いということが確認された。4年生の「無答」は55.6%と顕著に高い数値を示し気にかかる現象といえるが、「両立していない」理由との関連は明確ではない。今後さらに調査を行なうなどによって明らかにされる必要があるだろう。

海峰・<sup>2)</sup>齊藤らは、学業とスポーツについて「スポーツ活動による時間消費や疲労、睡さなどは、通常では学習効果にそれほどの悪影響はない」と報告している。

読書・新聞等に費やす時間は、「1時間」が圧倒的で、次に「0.5時間」と続き、「2時間」への回答は非常に少なかった。全体でも「0.5～1時間」の範囲に約80%近くの高率の回答が認められ、読書活動等の生活習慣に関しては、やや低滞気味であると考えられる。



今回の結果は、辻等<sup>11)</sup>の「運動部学生は生活時間に占める娯楽時間は比較的長いが、読む時間、する時間については短い」とする研究報告と一致した。

学業やスポーツの余暇として、趣味や稽古ごとで過ごす時間は「1時間」が最も多く22.5%であった。一方「2時間」(7.7%) 「3時間」(5.0%)にも僅かな数値を認めることが出来る反面、「0時間」の18.9%や「無答」への38.9%の回答率が示すように、全体的には趣味や稽古ごとへの関心は比較的低いといえる。適度な趣味や娯楽を持つことは、精神活動を高めたり、気分転換に役立つといわれている<sup>1)</sup>。余暇時間を自由に裁量して、時には日常と異なった時間配分を図る努力も大切であると考えられる。

生活費は「3万円前後」と「4～5万円」で全体の80%近くを占め、次いで「6～7万円」(15.2%)と少なくなり、「8～10万円」台には約5%と、低率の回答を示したに過ぎない。

男女別では、「3～7万円」の範囲にはほとんど性差がみられないものの、「8～10万円以上」には、少数値ながら女子が男子を凌駕している。

収入源については「両親」が断然多く、約70%の回答率をみることが出来た。一方「アルバイト」もかなり大きな収入源の1つであり、大学生の生活費として想像以上の比重を占めていることが今回の調査の結果確認することが出来た。

アルバイトの実施者は、各学年で相当数が認められたが、現状は「非実施者」(54.0%)が「実施者」(45.7%)をわずかに上回った形を示している。

週あたりの実施日数を全体的に概観すると「5～6日」(48.7%)が最高率で、「3～4日」(30.2%) 「1～2日」(16.0%) 「全日」(6.1%)となった。

一方1日あたりの実施時間については「5時間」が全体の過半数以上(55.9%)を占め、次いで「4時間」(17.8%) 「3時間」(13.5%)の回答結果が認められた。

ともあれ、昨今の大学生によるアルバイト「ブーム」は、本学のスポーツ実施者間でもほぼ同様の現象を示していると判断することが出来る。このような高率のアルバイト実施の背景には、本土派遣費の捻出のための実施者もかなりの数で存在すると思われるが、今回の調査ではこれ等のことを確認するには至らなかった。今後の課題としたい。

## 要 約

本研究の目的は、本学体育系クラブ学生の大学生活に関する実態を把握すると同時に、大学における今後のスポーツ活動の方向性を導き出すための基礎的資料を得ることであった。

主な結果は以下の通りであった。

1. 健康管理については各学年・男女共に「健康」を自覚している人が圧倒的であった。

大学入学後の通院・入院・怪我の体験は、試合や練習時の身体接触が激しいラグビー・柔道・剣道等に比較的長期の体験者を認めることが出来たものの、全体的には「全くない」が大勢を占めていた。

スポーツ傷害保険加入者は、クラブ間で保険に対する認識の程度差があり、全体的な加入率は低調であると判断することが出来る。

睡眠時間は「8時間」に最も多くの回答率(40.3%)を残したものの、アルバイト実施との有意な相関が推測できる「5・6時間」睡眠にもかなりの数値が確かめられた。

2. 大学生活については、過半数が「満足」感を持っていることが確認されたが、「不満足」感も各学年に認められ、なかでも1年生の40%（「非常に不満足」も含む）近くの数値は、憂慮すべき結果を示したといえる。男女別の満足度は、男子より女子の方が大であると推測された。

学習および調査・研究に関しては、4年生が積極的で、比較的長時間の学習を実施し、男女別では女子が男子を凌駕した結果となった。

学業とスポーツが両立していると考えている人は2・4年生で約50%、1・3年生は40%台の回答結果に終わった。一方学業とスポーツの両立の困難性については、男子の方が女子に比べてより多く自覚していることが推測された。

学業とスポーツが両立しない理由については、部活動のために学習時間が足りないとする直接的影響よりも、テレビ・ラジオ・その他のオーディオ等や、チームメイトとの雑談などが主要因となっていることがわかった。またアルバイト実施と「両立しない理由」との有意性も、かなり高いものがあると思われた。

大学生活における読書等に関する生活習慣は、概して低滞気味であると考えることが出来る。

趣味や稽古ごとに要する時間は「1時間」への回答者が最も多いものの、趣味や稽古ごとを特に持ってないとする回答が、各学年にしかも比較的高率で記録された。

3. 生活費は「3～4・5万円」が大勢を占め、回答率も80%近くの高率値を示した。一方「8～10万円以上」には僅かな数値ながら、男子より女子に多く認められる傾向を示した。

収入源は「両親」が顕著で最高率を示しているが、「アルバイト」による収入も相当大きなウエートを占めていことがわかった。アルバイトの実施者は各学年に認められ、全体の実施率は約46%であった。その内訳については週「5～6日」が最も多く、1日「5時間」に、全体の過半数を超えた回答結果が確かめられた。

謝辞：稿を終えるにあたり、御協力を頂いた沖縄国際大学体育系クラブの学生諸君に深く感謝致します。

## 引用・参考文献

- 1) 大学保健体育研究会 (編), 改訂体育学概論, 文化書房博文社, 1983. P. 259.
- 2) 海峰修・斉藤幸之「学校の運動部に関する研究」体育学研究, XI-5:266, 1966.
- 3) 金子英一・相良宏行・他, 運動と健康, 道和書院, 1985. P. 143.
- 4) 小出廉二「学生スポーツへの提言」松井三雄 (編), 教育・体育・スポーツ, 杏林書院, 1970, pp. 107-17.
- 5) 小村渡岐暦「学生スポーツの真のあり方を考え直す時期」体育科教育, 32-13:55-57, 1984.
- 6) 文部省, 教育指標の国際比較, 1982.
- 7) 小野三嗣, 健康をもとめて・青年期, 不昧堂新書, 1982, pp. 97-144.
- 8) 大西国男「大学スポーツと運動部の課題」茨城大学教育学部紀要, 28:69-78, 1979.
- 9) 総理府, 学生行動の実態調査報告書, 1977.
- 10) 辻忠・辻幸治「大学生の生活時間調査-運動クラブ練習時の実態-」体育の科学, P. 496, 1981.
- 11) 辻忠・辻幸治「大学生の生活時間調査-運動クラブ練習時の実態-」体育の科学, pp. 493-97, 1981.
- 12) 財団法人・学徒援護会, 学生教育研究災害傷害保険の事故統計に関する調査報告, 1982.